始

修養語錄

大正
4.11.18
内交

37
477

編者序

三宅雪嶺博士は學識深遠の哲人として、眞に人生に味到せる達人として、常に正義の指南車たる論客として、又何よりも類稀なる人格の人として、一世の師表と仰がれつゝあるの人。博士の言は何人も傾聽して深く肝に銘ぜんと欲するところである。博士多く書を作らず、しかも、その言説教訓の世に行はるゝもの、歳月と共に積んで、頗る浩瀚、容易に讀破しがたきに至つてゐる。そこで、その全集中より語短意長、句々珠玉にも等しき節を選拔してこゝに此一卷を作つた。博士の語錄たる此の一卷は、實に現代の論語である、處世のバイブルである。博士の思想の眞髓を得、

又、日常座右の銘として、博士の教訓に接しようとする者に對し此の小册子は尠なからぬ便宜を與へるであらうと信ずる。

此書を出版するに當り、編者は先輩安成貞雄氏を介して博士に許諾を請うたところ、博士は、多大の御迷惑を忍んで承諾を與へて下すつた。而して未知の一青年たる私をして、敢て選拔編纂の自由を恣にせしめて下すつたのである。誠に感謝に堪へない次第である。右、謹んで御禮を申上げて置くと共に、種々斡旋の勞をとられた安成氏にも謹んで感謝の意を表する。

春月生

人生觀

目次

◎人生……一
◎人間……六
◎人格……一〇
◎性格……一一
◎感情……一四
◎自由……一六
◎實力……一七
◎善惡……一九
◎幸福……二一
◎貧富……二三

◎長短……二七
◎變化……二八
◎主義……二九
◎自覺……三〇
◎懷疑……三一
◎得意……三四
◎生活……三五
◎發憤……三七
◎自信……三八
◎氣力……三九
◎運命……四〇
◎才能……四三
◎正義……四六

◎復讎……四八
◎觀察……五〇
◎希望……五〇
◎知識……五一
◎名聲……五二
◎愉快……五六
◎老壯……六〇
◎結婚……六六
◎旅行……六八
◎飲酒……七一
處世觀……七三
◎處世……七四

◎修養……八七
◎忍耐……九八
◎努力……九九
◎成功……一〇四
◎獨立……一〇六
◎經驗……一〇七
◎滿足……一〇九
◎思慮……一一一
◎人氣……一一一
◎目的……一一四
◎朋友……一一六
◎諾否……一一八
◎服從……一二〇

◎負債……一二二
◎靜思……一二三
◎言行……一二八

社會觀……一三一

◎文明……一三一
◎社會……一三二
◎秩序……一三七
◎時代……一三八
◎道德……一四一
◎科學……一四四
◎門閥……一四六
◎團體……一四九

◎事業……一五〇
◎職業……一五四
◎金錢……一五八

人物觀……一六三

◎人物……一六四
◎偉人……一七三
◎才子……一八三

政治觀……一八五

◎政治……一八六
◎國家……一八九
◎革命……一九五

◎政黨……一九八
◎憲政……一九九
◎輿論……二〇二
◎政治家……二〇三

教育觀……二〇九

◎教育……二一〇
◎試驗……二一四
◎休暇……二一九
◎體育……二二一
◎教育家……二二三

文藝觀……二二五

◎詩文……二二六
◎文人……二二七
◎繪畫……二二〇
◎藝術……二二一
◎音樂……二二二
◎演藝……二二三
◎風流……二二四
◎趣味……二二四
◎書籍……二二五
◎讀書……二二八

宗教觀

……二四一
◎宗教……二四二

◎神……二四四
◎信仰……二四五
◎經典……二四六
◎神祕……二四七
◎基督教……二四八
◎佛教……二五一
◎宗教家……二五二

死生觀

……二五五
◎生……二五六
◎死……二五八
◎健康……二六一
◎疾病……二六二

人生觀

目次

◎衞生……二六四
◎睡眠……二六五
雜觀……二六七

人生

怒るあり、泣くあり、大に笑ふありてこそ、世の中は饒かなれ、之れ無くば空々寂々たらん。

×

凡そ世上の事、強ひて毀貶せんと欲すれば何事か毀貶すべからざるもの無からん。

×

凡そ世上のもの、何等かの點に於て益あらざるは莫し。唯だ獨り大

小多少の差を見るのみ。

×

危險の多き處に興味の伴ひ、興味ある處に危險の伴ふ。

×

進化といひ進歩といひ進取といひ向上といふは、完成と認むべき無きを意味せずや。

×

何人も安んずる所あり、而して何人も惑はざる能はず。

×

歴史は曖昧なれど、制裁の掩ふべからざる者あり、或は疎にして漏らさずとすべきか。

×

自然は意外に公平にして、一生の功過に應じ禍福を分與す。時に不公平と見ゆるも、別に意義ありと認むべし。

×

世に犧牲的行爲なくば、人が生き甲斐を感ぜざる可し。大體に於て、部分に於て、人は死して生くるを思ふ事あり。

×

すべて分明なるは面白からず。全く分明ならざるも又不安也。分明なるところあり、分明ならざるところあり、泣き、且つ笑ふ。こゝに世相の趣は存す。

×

人生は短けれど、事を始むる、必ずしも三年五年に成し遂ぐるを要せず。待つことを知る者は勝つ、とは獨りビーコンスフヰルドの言にあらず。十年に望み難くんば、二十年に望むべし。一生に望み難くんば、後世に望むべし。人事を盡して天命を待てよかし。

×

學生當時に考へしが如き如意世界の存在せざれど、卒業の際に考ふるが如く不如意なるやは聊か疑ふべし。

人間

人は眇たる蒼海の一粟たるにせよ、其の一粟たるは確實にして、天地間一も之と相ひ同じき無く、吾が小なる身體は實に宇宙間唯一にして無二なり。

×

社會に無用の人物あれば其丈け社會の損失なり、廢物利用は先づ人

間に於て考ふべし。

×

凡そ人は皆多少前よりも一層美にせんことを欲するものにして、多くは衣食住を美にせんとし、或は交際の間を美にせんとす。藝術に專らなる者の如く特に美を念とせざるも、美を進むるに與かる所少しとせず。

×

人は動靜を兼ぬべきもの、一方に偏するに任かせば何等か失ふ所あり。

×

國家の統治を要すると同じく、個人亦た頭腦の統治なきを得ず、萬藝に通ずべき才能を屈して之を一事に集注するは、其の人に取りて頗る苦痛にして腕の鳴るが如き心地せんも、此の苦痛を忍ばずんば、生存の方針を定むべからず。

×

好む好まざるを胸中に祕する者は、兎角人に好まれざる跡あり。

×

林子平は、高山彦九郎を謂つて渠れ泣癖あるのみとせり、彦九郎實

に泣癖あり、而も其の泣くや至誠に出づ、敬すべきなり。世間時に能く泣き、而して絶えず誠心なき者あり、詐僞師、奸商、探偵等に之れあり。演說遣ひ、出張官吏、事業發起の觸れ廻りに亦之れあり、涙脆きは油斷のならぬ者なり。

×

個人に就て觀れば、德行ある者必ずしも榮えず、往々禍を被ることあれど、多數の上にては道義直ちに盛衰に關す。

×

一生涯の事全く志と違ふは、柄になき事を志望せしの誤りにして、

斯くまで自ら知るの明なきは、到底言ふの價値なし。

人格

人格は猶ほ香の如く、蓋すと雖も、芳薫悪臭自ら別かる。下劣野卑なる徒輿が修飾して僞を掩ひ得ざるに反し、高潔なる者は何處に在りても幾許か眞價の認めらる。

×

人格の等級は恰もピラミッドの如く、上ほど少く、下ほど多く、俠的人物も優位なるは少く、劣位なるは多く、最も劣位なるは最も多し。

性格

性格は人の生まれてより死に至る一生涯に彌(わた)るものにして、以て傑出せるは最も偉大なりとして顯はる。

×

圓滿なるは安全なれど、盤根錯節を斷つには鋭角なる刀劍に若かず。

×

人事は一律に解すべからず、此人の性は此の如し、故に其の計畫する所應(まさ)に此の如かるべしと言ひ、彼れは彼の事を經始せり、故に其の

性應に彼の如かるべしと言ひ、性質に料りて事業を察し、事業を見て性質を稽ふ、而も其の眞相を猜し得て能く中れるは多からず。蓋し事や概して四圍の勢に支配され、或る事の經營せらるゝ、必ずや幾干か個人の力の顯るゝあるも、四圍の勢の强き、此を掩沒して殆んど見る能はざるに至らしむ。特別に個人の力量の大ならんには、變動の起るに際して、彷彿の間に之を認め、以て少しく其の人と爲りを料るべきのみ。

×

人の性質は一樣ならず、中に好んで脫線するあり。浮世話を複雜にするの利益あれど、脫線者の多くしては、秩序を紊し、延いて進步を妨ぐ。幾人かの脫線を豫定し置くも、多數をして線路を進ましむるに務むべし。

×

己れ特長なくして自ら用ゐんとする者の失敗すると同じく、己れ圭角多くして衆と相ひ容れんとする者も亦た失敗す。人々皆な一長一短あり。

×

力ある者は力に應じて人事を識得せんも、力なき者は特に識得する

所あるなく、加ふるに良心の缺乏せる者は、愈々學習して愈々惡道に陷るを免れず。

×

不得要領は進歩すべき餘地あるを示す。不得要領を以て輪廓の大なりとするは、幾許か斯かる意義よりす。されど不得要領は進歩すべき餘地あるが故に貴く、不得要領なる儘に終れば何の稱すべき無し。

感情

是非を問はずして感情に走るを批難するの多きも、感情の激するは、

當人の必要に出でし者、必要は議論に於ける一の主要なる根據たるを失はず。

×

感情に據りて議論を立つるの易きも、豫じめ議論を立て感情を動かすこと甚だ難し。

×

人類は理智のみの動物ならず、感情の加はれるの頗る多く、感情よりして生活の愉快もあり。

×

人の熱心に爭ふは、激せる感情を滿足し得るや否やにあり。

自由

貴ぶべきは自力的自由なり、他力的自由ならず。

×

鳥飛びて空氣の壓迫を感ぜんも、空氣なければ飛ぶを得ず。魚游ぎて水の壓迫を感ぜんも、水なければ游ぐを得ず。壓迫なきの自由は、殆ど全く夢想に屬すべく、壓迫に堪へ、壓迫を凌ぎ、而して尙ほ志を枉げざる、玆に精神の自由ありとす。

實力

濫りに威嚇せず威嚇せば同時に實力を以て進むは、或る點に於て不得策なるも、或る點に於て得策ならずとせず。或は爲めに無益の困難を招くことあるも、又た無益の困難を早きに消滅せしむることあり。たとへ外交に於て疑はしきにせよ、其他に於て利の損を償ひて餘りあらん。

×

機會を得ざるがために大に爲す事あるを得ざるは、可なりとせん。

唯、價値卽實力。すべて物はツブシの値の利くをよしとする而已。

×

過去にても、現在にても、將來にても、人の行くべき道を二種に別つ。一を既成道路、一を新たに造るべき道路とす。世俗の謂ゆる最上の位置は多く空名に屬し、實力の如何を表示せず。實力を恃む者は空名の外に考ふる所あるが、此等は既成道路を行くを欲せず、成るべく自ら道路を造らんと欲す。

×

力ある者は如何なる事情の下にも、何事をか成し遂ぐべし、力なき

者は如何なる事情の下にも特別に爲す所あるを得ず。

善惡

凡そ事の何たるを問はず、達者といふ域に到れば、皆な無心にして其の事を成す。人の徒歩し勞を感ずるは、未だ脚力の到らざるが故にして、獵師は無心に歩を移し、終日疾行して疲るゝ莫し。裁縫師の若き、工匠の若き、尺を度りて裁す、繩墨を施して截る、過誤を犯す無からんとして心力を費す間は、その術の到らざるもの、達者ならんには其の場に臨みて自然に之を成すことを得べし。善を行ひ惡を避くるも

亦た然り。善なるが故に之を行ひ、惡なるが故に之を避けんとし兢々として、憂へて已まざるは皆到らざる者、一層進境に達するに及び、善に會ひては其の善なるを思はずして之を成し、惡に會ひては其の惡なるを念はずして之を避け、自然に之を行ひ自然に之を避け、胸裏復た一片の故意を止めず。而して此の境に到る、卽ち事の大に熟せるものと謂ふべし。

×

會て惡事を働きし者は他の惡事を責むるの嚴なるを得ず。

×

君主宰相の功名心に富むは、太平無事に安んぜず。强ひて口實を求めて戰端を開くに及ぶ。小人の閒居して不善を爲すも、空しく閒臥するを得ざればなり。

×

心の欲する所に從ひ矩を踰えざるは、是れ洵に小兒の心にして、少しの巧みを弄せず、少しの故意を存せず、全然無心にして、而も成すこと皆な善ならざるなし。眞の小兒の發達して其の本に復れるものなり。

幸福

凡そ幸福は人の望む所、人として之を悅ばざる無しといふべきも、而も常に幸福をのみ念とすれば、却て之を得ざるの稀れならず、餘りに己れの爲めにする者の自ら損するに反し、犧牲獻身を敢てして幸福を得たる一にして足らず。

×

富と雖も、身に奉ずるに限りあるべく、限りあるを知りて、餘るを世道世益に使用してこそ、始めて貧者より幸福とすべけれ。

×

下層は人の居るを欲せざる所、最下層は愈々人の居るを欲せざる所、

貧富

啻に不愉快なるのみならず、事を成し遂ぐるに不便なり。華族に生まれ、富豪に生まるれば、多く勉めずして好位置を得べきが、而も思ふ存分に能力を發揮する點よりせば、下は下ほど利益あり、最下層に至りて最も妙を覺ゆ。人の力に限りあり。英雄機會を造るといふも、無より有を出だすべからず、時非にして奈何ともすべからざるあるも、今は舊幕時代に比して頗る機會に富む、好機會に富む。下層に生まるゝとも何かある、最下層に生まるゝは、必ずしも大なる幸福ならずとせず。

財産は一の難問題たり。社會の上より貧富懸隔を觀、之を調和するの方法を按ずるの難きに非ず、各自隨意に財産を有し得るとして、其の何故に財産を有するやを判ずるの難きなり。

×

その富を廣く衆人に矜誇し、一般の羨望を惹かんとせば、事業を遂行し、事業を以て人を動かすに若くは莫し。徒らに金殿玉樓を建設して人に傲るは人に傲るの頗る拙なるもの。

×

大人は赤兒の心を失はざる者とあるが如く、事理に通ぜる富者は、

貧者の心を失はず。

×

財利は限りあり、一方を厚くするは他方を薄くするなり。聲名も限りあり、一方を高くするは他方を低くするなり。名利の存する所、即ち競爭の行はるゝ所、其の激烈なるは戰爭の慘よりも慘。勝ちて祝する者ある側、敗れて落膽するの幾人なるを知らず、富貴は殆んど怨嗟の中に獲らるゝもの、呪はれざらんと欲して得んや。

×

生時には富める者最も羨まれ、貴き者之に匹敵す、他は實に言ふを

値ひせず。而も久しきを通じて觀れば、其の位置は全く顚倒するものの如し、かくて自然の權衡の得らるゝやに見ゆ。

×

我國は貧富の懸隔甚だしからず、二者の關係を慮ること歐米の如くする必要なきに似たれど、懸隔の甚だしからずとて、更に一層親善するの好ましからずとせず。且つ現に懸隔の甚だしからざるも、其の早晩然るの避くべからずんば、先例を鑑みて豫め衝突を緩和するに務むるの得策なるに非ずや。

長短

好んで短を知り、惡んで長を知る。

×

何人にも長所と短所あり。面の相異なるが如く、能力も亦相異なる。無能と目せらるゝ者にも、他の及び難き所無からず。愚人と雖も、其愚及ぶ可からずと云ふが如きあり。人は須くその長所を發揮す可し。唯長所の何なりやを知ること、甚だ容易ならず。

變化

人の力量の現はるゝは、主として變化の際に在り。變化なき處には、力量を試むるの機會なしと謂ふべし。

×

世の絶えず變遷するに伴ひ、昨の必要、今日不必要なるあり、今日必要なるも、明日如何なるべきやを必し難し。新陳代謝の宜しきを得るは進歩すること速かにして、之に反するは反對の結果を免れず。

×

一事に定住せず、絶えず變化し廻はるは、其の人の自由意志にして實に好機會に遭逢する所以なりと雖も、其の最も不幸とすべきも亦た此に在るを忘るべからず。

×

變化も或る範圍内に於てし、其の範圍は必ずしも全く知るべからざるに非ず。

主義

維新前、勤王の士の稱せらるゝは、主義の爲めに利達を斷念するの

避くべからざりしを以てなり。

×

鑄型、必ずしも惡しからず、窮屈亦已むを得ざるの場合あり。されど教育には何程か必ず改めざる可からざる缺點あり、無益の精力を費すの嫌ひあるを免れず、自然主義は惡しき意味に解すれば頗る惡く、人をして野蠻に歸らしむるものなれど、善き意味に於ては人事の一切に適用す可し。教育に於て亦然り。

自覺

青年の自覺、婦人の自覺等、自覺といふの流行し、單に個人に限らず、國民の自覺をも必要とせるが、自覺は多少何人にも期し得ると同時に、之を十分にせんは甚だ難し。

懷疑

知らざる所に迷ひ、迷を轉じて悟れるを覺え、更に悟りの迷ひなるを疑ひ、迷悟相ひ逐ひて環の端なきが如し。

×

疑惑其物は價値不明にして、疑惑に依りて眞實を得る所に價値あり。

×

人は平日特に疑ふこと無く、疑ふをも要せず、日出づべしと信じて、日果して出で、春來るべしと信じて春果して來る、明年の出來事も何程か豫定し得べく、生活上疑ふよりも信ずるの遙かに多し。

×

信ずべきを信ずべしといふの當然なると同時、信ずべからざるを信ずべからずといふも當然にして、惑ふ勿れと勸告するの反面に、惑へよとの勸告なきを得ず。

×

古來懷疑派なる者は何事をも疑ひて已まざるに似たるが、如何なる懷疑者流も事毎に懷疑するに非ず、必ず何等か信ずる所あり。

×

大抵懷疑といふは、一時獨斷に對しての反抗にて、時に極端に懷疑する狀あるも、漸くして疑を去り、動もすれば別に獨斷するに至る。

×

日常の事こそ其の儘に過ごし得れ、一たび森羅萬象を考ふれば、知識の足らざるの餘りに明白にして、其の足らざる所に疑ひを挾まざらんと欲して得ず、斯かる際には、己れを拘束する或る格式若くは己れ

の尊敬する或る人物に依りて疑ひを解くことあり。

得意

今の得意失意といふは、維新の三傑西郷大久保木戸を以て當代の元勳に劣れるといふと同じ、彼等の眼底には西郷の城山に斃れしの甚だ愚劣なるらしく映ぜん、而も笑ふ者と笑はるゝ者といづれが愚劣なるかは、多く論を俟たざるに非ずや。男兒世に出づる、よろしく斯かる愚見を抱くべからず、更に一層男らしく、一層雄大ならんことを志ざすべし。

生活

高き思想にして低き生活するは、文學者として最も安全なる途。元と低き生活は人の好まざる所なれど、其の低きに堪へざれば、動もすれば不平を濫りにし、同胞を呪ふに至る。

高き生活は父祖の遺産あるか、又は營利を事とするか、孰れか其の一を要す。富みて高き思想と高き生活とを兼ぬれば、其れ丈け可なるに似たれど、高き思想よりせば、己れ獨り高き生活して他の多くの窮困者を見るに忍びず、必ず何等か之を濟ふに勉めざる能はず。

然れども此の如きは容易に望むべからず。責めてもの事に、高き生活する者に成るべく高き思想を有せんことを望むべし。低き思想にして高き生活するは、啻に人として恥づべきのみならず、其の高き生活は、偶々世の恨みを買ふに終らん。若し夫れ低き思想にして低き生活するに至りては、凡の凡なるものなり。

×

生活難にして贅澤の難きを指さば、則ち聽くべし。生活し得ずといふの類は、誤まれるも甚だし。

×

世の謂ゆる職業難は、餘り茫漠に失す。職業を得ずと聞き、生活し得ずと解する、恰も失戀者を以て永遠に獨身たるべしと爲すが如し。

發憤

人の能力に限りあるも、奮發すると否とにて、行動に少からざる差違を生ず。火事に際して擔ひし所、鎭火後に擔ふ能はざるが如き、全く神經興奮の如何に因る。

×

孔子が發憤食を忘れ、樂み以て憂を忘れ、老の將に至らんとするを

知らずと曰へりしこそ事の可なるに庶(ちか)けれ。知らざるの如何はしきも、斯くして老の到る、到るとも何か有る。

自信

自信は人に缺くべからざるも、此の一事のみ缺くべからざるに非ず。天上天下己れ一人の爲めに存せず。

×

初め皆な自ら任ずるも、人の許すは少く、人の許すも、能く豫想に違はざるは幾人ぞ。

氣力

言ふまいと思へど今日の暑さ哉とは閑人の語、勤務勞働して偶々此に考へ及ぶは、緊張せし氣力の緩めるに出づ。

×

氣力の人に於ける、一言にして喩ふれば、猶ほ蒸氣の汽船に於けるが如し。

×

凡そ人其の職業の如何に拘はらず、氣力を發する大なる者は、皆な

以て偉大とするに足る。

運命

天下の事固より一人の能くする所に非ず、時勢亦た自ら然らしむる所のものあり。醫の疾を治むるや、其の術他あること莫し、之を自然に癒ゆるに導くのみ。病の癒ゆると癒えざると、多くは病者自身に在り。英雄の由りて以て成功する所以に就きて之を察するに、其の勢の爲めに惠まれしを多しとすべく、彼の勢威赫々として天下を壓倒し、功名永く後世を照すあるが如き、自己の能力の與かる無きに非ざるも、

其の周圍の形勢に促がさるゝや洵に大にして、常人の認むるよりも一層甚しきものあり。

×

手を伸ばさぬが安全、手を伸ばせば危險之に伴ふと言ふ。しかも人は其運を圖る可からず。石橋を叩いて渡るもの必ずしも萬全ならず。不幸にして失敗する事もあらんが、そは單に不幸といふ可き而已。

×

成功と失敗とは種々の見地より觀らるゝが、要するに働きの外面的に最も多く現はるゝ者、最も多く賞せらるゝを常とす。成敗の眞相の

俄かに斷ずるを得ざる所以也。

×

何人も皆な運命に制せられざる無きこと、猶ほ如何なる航海にも、必ず多少の幸不幸あるを免かれざると同じ。

×

與へられたる運命といふと雖も絶體絶命といふが如き場合は甚だ多からず。其の甚だ多からざる場合にも尚ほ何等かの詮方なきにあらず。絶體絶命ならざる場合には優に餘裕あり。或は綽々として餘裕あり。

×

運不運といへば、一應理解すべきが如くなるも、少しく立ち入りて考ふれば、其の運不運の眞に運不運なるや、頗る疑はし。

才能

老齢につれて能力の減じ自信力の增すは、善人に在りても猶ほ免かれざる所、德義的及び氣力的の缺點は、初めの間こそ能く抑ふるを得れ、後ち次第に發現し來りて、永く活躍し得ざるの唯だ幸たるを見る。

×

幾許か能力を備ふれば、必ず幾許か志望を達すべし。

×

人に能不能あり、能者に不能あり、不能者に能あり。低能兒と生まれざる限り、各々己れの能を發揮すれば、何人の前に出づるも恐るべき無し。而も之を發揮するには、徒らに時日を費すの惡癖を作るべからず。

×

藝は身を助くとは舊幕時代の語、粹が身を喰ふの果、なほ僅に口を糊するの技を得といふを意味す。藝は素より是れ等の事に限る可からず。遊戯三昧、惡戯三昧、その果、往々眞の生活要素となる。

×

恃むべきの能力あり、我儘なるも可なり、又必ずしも人と合ふを要せず。社會に缺くべからざるもの社會之を棄て措くことをせず。

×

學校にて養成し得るは、能才を啓發するに存し、天才に對して何の爲す所無し。天才は生まるゝ者にして、作らるゝ者ならず。

×

貧にして富まんとする者は、貨殖の天才を發揮し得るも、他の天才を發揮し得ず。富の爲めに累はされずして、然る後ち固有の才能を發

揮するに堪ふ。

×

或る能力の秀で、他の能力の缺けたるは強ひて其の缺けたるを補ふに務むるが爲め、秀でたるをも萎靡せしむる無しとせず。

正義

俗に一押二金三男といひ、押と金とを男の上に置くが、其の謂ゆる男は容貌の美醜を意味すれど、又た幾許か性質に適用すべし。押しの強きこと星亨の如くなるは、廉潔を以て愚とし、正義を以て弱者の聲

とし、何の方面をも押し通りて顧みず。君子は之を觀て人衆(おほ)き者の天に勝つを歎ずるのみ、反響あるも實際に何程の効果なし。馬哈墨(マホメット)の法を說くや左手に經典を持ち右手に劍を拔けり。正義の士の敗るゝは活人劍を知り殺人劍を知らざるに在り、不正の輩と同等に押しの強くんば、之を仆すに於て何か有る。正義は子女と同じく擁護者を待つ。

×

不正不義なる者も不撓不屈なるの故に勝つ、正義の士何ぞ不撓不屈にして勝たざらん。

先づ威武を以てし、次ぎに恩を以てせば、無理の通るの少からざれ

ど、天定まりて人に勝つとあるが如く、晩かれ早かれ、引込める道理の無理に勝つを豫定すべし。

復讎

怨を以て怨に報ゆるの非とし知らるゝは、暴を以て暴に易ふるの非とし知らるゝと同様、自明の理なるが如し。

×

實に人の品性より言へば、怨を以て怨に報ゆるは下等、直を以て怨に報ゆるは中等、德を以て怨に報ゆるは上等、人の漸次向上するを希

望すべき筈なるが、強ち高きを望むも之を事實に見ざるを如何ともする能はず。

×

德を以て怨に報ゆるは、常人の到底企て及ばざる所、唯だ直を以て之に報ゆるは、或は能くするを得べく、而して世間の實狀に徵すれば、怨を以て怨に報ゆるの最も普通にして、たとへ一飯の德必ず償ひ、睚眦の怨必ず報ゆるの甚だしきに至らざるも、表面こそ種々の形に現はるれ、根柢に於いて、怨を以て怨に報ゆるの情の容易に消滅せざるを見る。

觀察

眼を閉ぢて考ふるは宇宙を小にするもの、唯だ宜しく眼を開くべし、觀察し得らるゝ限りを觀察すべし、宇宙に對して考ふる勿れ、試みよといふは、之を觀察せよといふ事なり。

希望

徒らに偉大なる希望のみ懷きて、鋭意遂行に瞑(つと)むるとも、苟も其の器に非ず、又其の時に非ざれば、竟に功を見ざるべく、特に漫然希望

を高大にするに過ぎざるは、單に一の妄想にして、夫(か)の夢みる者と何の異なる所なし、其の稱して立志とするに足らざるや明けし。

×

人として、國として、妄りに疑ふ者の運命は疑はし、希望あるを信ずる者は希望あり、愈々信じて愈々希望あり。

知識

知識は歳を逐うて堆積するも、現代の知識の過去の知識に優るが如く、將來の知識は現代に優るべし。

×

人の世に立つは單に知識を以てせず、或は意力を以てし、或は才幹を以てし、或は情操を以てし、知識と比して孰れの最も重要なるやを言ひ易からず。

名聲

永く傳はること、弘く知らるゝこと、皆時勢の然らしむる所、其人の實力如何よりするに非ず。

×

世に知らせて知られざるあり、知らさずして知らるゝあり、早く知られて早く忘れらるゝあり、晩く知られて永く知らるゝあり。

×

凡そ事は或は聞え、或は聞えず、名聲は必ずしも言ふを値せず。唯だ長と幅と厚とを合はせ、比較的積の最も多きを以て最も長命なりとすべし。

×

功名に意あらば、其の徒らに求むべからざるを察せよ。

×

後人に記憶せらるゝの必ずしも稱するに足らざる、猶ほ數百年間保存せられたる骸骨の特に欽するに足らざるが如し。

×

夫れ一世の雄たるもの、猶ほ以て盛名を百年に保つこと能はず、況んや凡庸闒茸の資を以て百方苦心、僅に其の名を揚げんとする徒をや。

×

凡そ人の世に爲すあらんとする、必ず短日月に成功せんことを望むべからず。長き年月の間に於て功を收めんとする、須らく名の實に浮ぐるを避けざるべからず。たゞ能ふ限り名の顯はるゝを防ぎ、而して

能ふ限り勉强するを要す。斯く專ら名を避け實を先にするの餘、多少名の顯はるゝに至らんか、依りて得る所の名は、決して危險なる性質のものならず。

×

名と利と相ひ類似すること少からずとする、則ち名の多くの點に於て、利よりも更に輕便なるを看るべし。

×

古來世界に名ある人にして、自から世界に名を馳せんとして經營し成功する所ありしは極めて少し。多くは初め一地方の事なりしに、時

代の經過につれ漸々顯はれ、其の名終に世界に及び、史乘朽ちざるに至りしなり。

×

商界に於て大に取引する者の則ち信用に依るが如く、社會に於て大に活動せんとする者は、主として名に依るの狀あり。

愉快

食なきは食を得て喜び、衣なきは衣を得て喜び、住なきは住を得て喜び、惡食惡衣惡住なるは、美食美衣美住を得て喜ぶも、美食美衣美

住なるは何を以て喜ぶや、一層美なる食衣住を得て喜ぶも、其の喜ぶの程度は、食衣住なきものゝ之を得るに比して頗る低し。其日暮らしの勞働者が百圓を得れば、手の舞ひ足の蹈みを知らざるべきが、三井三菱の主人が斯く迄に喜ぶは何の場合に於てなるか。新たに百萬圓を得れば、不快を感ぜざるべく、而も特別に愉快を感ぜじ。勞働者の萬倍を得て尙ほ其の幾分一の愉快を感ぜざるなり。世間の大なる愉快とする所に慣れ、普通の愉快を愉快とし感じ得ざるなり。

×

輕薄なるものは愉快に感ぜらる、帽子は輕くして薄きを快とし、衣

服も輕くして薄きを快とし、寢衣も輕くして薄きを快とし、荷物は猶ほ更ら輕くして薄きを快とす、凡そ膚に接觸する、輕薄なるより快なるあらんや。然れども霜氣森々、風稜戚々たる夜、着る所は重きを厭はず、纏ふ所は厚きを厭はず、彌やが上に彌やに衣類を着重ねんと欲するなり。荷物も價あるを欲せば、決して重きを厭ふべからず。

×

罪に問はれざるも、爲すべきを爲すを厭ふの習癖となりては、生活に苦まずとも、空々寂々、苦もなく、樂もなし。醉生夢死にて差支なしと言はゞ言へ、愉快の少きを如何にする。

×

苟くも爲す所にして愉快の感と義務の念と兼ね存するあれば、其の人は卽ち當然の事を爲せる者とすべし。之に反し、其の爲す所に不愉快を感じ厭ひつゝ瞿むるは、卽ち事に役せらるゝ者にして卑屈の行爲と謂ふべく、又た單に一己の愉快を感ぜしむべき事を擇びて之に耽るは、理の以て慾を制する能はざるによると謂ふ可し。

×

實力を以て虛勢に勝ち、實質を以て虛榮に勝つは、啻に人生の職分なるのみならず、其最大愉快の一なり。

老壯

老年となりては、唯だ運命の定むる所に從ひて成し能ふ所を成すべし。

×

老人は老人として奮勵すべく、又奮勵せんことを勤むべし、老耄せるやの疑あるも、其の判明するまで働かしむべし。

×

德は才と質を異にして、老年に至るも衰ふるの甚だしからず。多年

の經驗にて世態人情に通曉する丈け愈々益々圓熟す。若し年と共に進み得るものありとせばそは德なり。

×

體力及び氣力を以てせば、壯年なるに若くは無し、才能に經驗を加へたるは六十まで事に堪ふべく、稀れには七十を過ぎて尙ほ堪ふべし。而も德に至りては、七八十も可、百も亦た可、壽にして愈々可なり。

×

老人の眼には世界に新たなる事なしと見え、壯者の眼には何事も皆な新らしく且つ變化すと見え、此間の差違は時として意外なるほど著

るしきことあり、若し老人にして豫め此邊の事を察せば、壯者の言に就いて少からず理解する所あるべく、壯者にして此邊の事を知り居らば、或は己れの識見の足らざるを曉らん。

×

老人の經驗を恃み經驗を誇るの稱すべからざると同じく、壯者の全く過去の事實に暗く、己れ知る所の事は悉く新事實にして他の知らざる所なるかに思ふも亦た誤る。是れ双方共に宜しく意を致すべき所とす。

×

少壯の怠るは老年の勉むるに劣る。

×

壯年にて著手せば、日暮れ途遠きの歎なく、老年にても著手しさへせば、亦た日暮れ途遠きの歎なきを得ん。

×

妄想的の功名心に驅られ、强ひて老衰の身を鞭撻するよりは、悠々自適、泉を汲み花に灑ぐを以て自ら知るの明ありとするも、事を成すに堪ふるの躬を捨つるは、天物を暴殄するに同じ。

×

老朽なるは成るべく老朽ならざらんとし、若朽なるは成るべく若朽ならざらんとし、及ぶ限りを盡して然る後に已むこと、之を人事を盡して天命を待つといふ。

×

春秋に富むは一種の資産にして、以て事を成し得べきに似たれど、事は時のみにて成らず。

×

日暮れ途遠ければ、燭を照らして進むべし、日の暮るゝと否とを問ふを要せず。

×

日暮れ途遠しとは、尚ほ未だ甚だしく疲れず、進むべきに進むの餘勇あるを示す者、其餘勇を振ひさへせば、優に何事をか成すを得ん。

×

少壯者は元氣に任せて危險を冒し艱苦を耐へ忍ぶべし、能力なくして誇大妄想狂に類するあるも、其の甚だしからざるは、其の儘に何事をか成すを得べく、唯だ甚だしきを檢束し、若くは瘋癲病院に入るべし。

×

四十不惑とは種々の意義に解すべく、一に限るべからざるが、總じて一身上の疑惑は其の以前に於てすべく、其の以後に疑惑の絶えずとも、以前と趣を異にし、疑惑に制せられずして之を制すべし。

×

常に身體の攝養に努むると共に、頭腦を新しくするに努めよ。かくて新しき刺戟物に對せよ。此の如くにして、老いて益々盛なることが得可く、或は死に至るまで青年なるを得ん。

結婚

我國に在りては、結婚は却て一家を維持するに都合好し。男子のみなれば衣食住共に不經濟に失するの常なるに、彼國に在りては、結婚に伴ひて自然に贅澤に走り、爲めに費用を多くする恐れあり。

×

久しく外國に在り、其地の女子と結婚して生活を送れる者の、日本に歸りて感ずるは、女子の一般に不活潑に見ゆるは好ましからざれど、亦た一種優りし所あるの羨ましきに堪へざること是れ。彼國の所謂同權なるものに慣れたる眼より觀る、或は爾かく感ずるならん。

而も我國には又た妻を虐遇して以て得々たる者あり、若くは外出し

て雌伏する代りに家内に於て雄飛を試みんとする、皆な決して稱すべきに非ざれども、猶ほ是れ封建時代の餘習にして、或る點に於て男子の氣力依然殘存することを證するものとして差支なし。

×

我國の女子が妻と爲りて下女と同一の待遇を受くるは、褒むべきの事ならざれど、夫婦互に外觀を飾りて過度の心勞と費用とを招くの少きは、或る點に於て幸福といふべし。

旅行

今人の旅行する、風俗を視察するか、否らざれば商工業を視察すといふ。此等の視察は固より必要ならざるに非ざれど、單に自然界を樂まんが爲に周遊歷覽するも亦た不可ならず。事は直接に目的を求むるよりも、無意味に運爲するの却つて利あることあり。餘りに人事に專らにして常に齷齪たるは、或は事業に成功するの捷徑たらんも、爲めに雄大の氣象を損するの恐れなしとせず、自然界に遊ぶの風、豈に養はざるべけんや。

×

今はエキス時代といふべく、何事も精粹を得るを貴び、比較的必要

なきを粗略にし、主力を最も必要なるに注がんとす。行く行く名所舊蹟を尋ぬるの可ならざるに非ざるも、寧ろ尋常の山尋常の河、汽車の窓より一瞥し去り、唯だ最も重要なる場所を選び、下車して之を詳にするの適當ならん。汽車旅行は短距離に於て、舊旅行ほど知識に益せず、距離の延長するに隨ひ、漸く益すること多し。

×

若し旅行によりて心胸を鍛錬せんと欲せば、初より其の心して羇程に上り、種々の艱苦を嘗め種々の經驗を積むに勉め、雜多の社會に出入し雜多の人物と對話するに勉め、如何なる難境に陷落すとも窘窮し

て、悶々せざるの覺悟をきめざるべからず。而して是れ皆な勉强の効を積みて得べき所、準備無くして漠然海外に發程する者の、能く望み得る所にあらず。

飲酒

酒を飲むは妨げなし、酒に飲まるゝは愚なり。若し夫れ酒を假りて悶を遣るに至りては怯と謂ふべし。酒を飲まずんば樂しむこと能はず、酒を飲まずんば鬪ふこと能はざるが如き者、竟に何をか爲し得ん。

處世觀

處世

人の世に處する、翅に進むの難きに非ず、退くも亦た難し。風雲に際會して一代に雄揚する、固より容易ならざるも、退きて終を克くするも豈に易事ならんや。實に退くの難きは、寧ろ進むの難きより更に難きものあるなり。

×

若し煩悶の効果の甚だ少きを察すれば、空しく煩悶することを思ひ止まり、別に善進の途を求むべし。

×

知るべからざるを知るべからずとして、時間の許す限りに於て之を知らんとし、而して普通の事に於て安んずる所あるが、若し工夫を凝らせば、更に有益に時間を費し得べし。

×

自らの生活難を語るとも、之を滑稽にし、衷心より憂ふるが如きなるべからず。眞に考ふべきは、如何に世に立つかにあり。

×

人の事業は一生を通じて始めて成り、或は後繼者を得て漸く成る、

早く成れる名譽は早く消失し去り、其の久しきに續くべきは久しき間の力を積みしものならざるべからず、早きに於て之を求むるは、躬の早く老衰せんことを求むるに異ならず。人生測り難しといふも、自ら求めて早く老衰せんとするは智なりと覺えず。須らく能ふだけ力を致しつゝ、能ふだけ氣を長くし、大器晩成を期すべし。

×

若し一譽辭を聽いては則ち喜び、一毀辭を耳にしては則ち憂ふる、恐らくは終生唯だ喜びと憂ひとに追あらざるべく、其の倏にして喜び、忽にして憂へ、忽ち憂へて而して又た倏ち喜び、一喜一憂定まりなきの態、之を傍人より觀る、或は失心者に類するの感あらしめん。

×

人爵に拘泥しては到底思はしき事を爲すを得ず。志の大なる者は先づ顯榮を斷念せよ。顯榮を斷念して左顧右盼する無く、然る後に生れ甲斐ある生活を送るに堪ふ。

×

絶頂は狹し、之に登ると共に降らざるべからず。

×

女が、一生の苦樂他に依ると云はるゝ間は、其の位置高まらず。男

が、事業の成敗機會に依ると思はるゝ間は、其人の信用は高まらず。

×

人の世に處する、其の是とする所を採り、其の是とする所を守り、其の是とする所を言ひ、其の是とする所を行へば則ち足る。

×

人を以て言を棄つべからざるも、又た言を以て人を採るべからず。

×

是非とも爲さざる可からざる事は斷乎として敢て之を爲す。第一の勝利は玆にあり。

×

修むる所の己れの才に適せざるを知りて改めんとならば、宜しく早きに於てすべし。早きに於てするを得ずんば、定まりし運命の下に如何ばかり力を攄べ得るかを試むべし。是れ亦た勇者の事たるを失はず。

×

如何に將來を憂へたりとて其れ丈け良果を得べきや疑はし。唯だ平素爲し得る限りを爲し愈々の場合に臨みて亦た爲し得る限りを爲せば可。世に立ち世に處するは易々とせざるも、或る青年の考ふるが如く爾かく困難なるものにあらず。

×

萬能餘りありて一心足らずとは、何の時代にも戒めらるれど、特に現代に戒められ、恰も軍隊の全力を集中せざるべからざるが如く、人々各自一生の力を集中すべきの望まる。

×

姑息は要するに姑息にして、百方形を整へ辭を飾り、永く相ひ替はらざるを誓ふも、離るべきは遂に離れざる能はず。

×

膽を大にし心を小にすべしとは、意義の解すべきも、之を人に說明し

易からず。心を溫くし腦を冷くすべしといふも此と列を同くし、精神を心臟及び腦髓に歸せし往昔の習慣に由來せるが、情及び智に配當すれば少しの不可なし。溫心冷腦の必要は語の如何に拘らず、人の一般に認むる所、解せざる者には、更に語を換へて曰ふべし、心を春風の如くし腦を秋水の如くすべしと。

×

薄志弱行なるは、何事を爲すも十分に遂げず。輕佻浮薄なるは、事業に從事して信用を得ず。品性の如何はしくして相當に成功するあるは、僥倖よりせずんば或る點に信賴すべき者あるが爲めにして、一例

を擧ぐれば、他の事に虛言を吐くも、關係事業に就て何處迄も眞實なるなり。

×

何業にても成功を期しては、惑はんとして惑ふを得ず、惑ふの徵候あれば、飽くまで之に打勝ち、勇往邁進して志を達するを要す。

×

新陳代謝は生命の繫がる所、其の停滯するは卽ち衰頽を意味す。青年の意氣旺壯、新に就き奇を求むるは、自ら進み、併せて他を進むるもの、其の猪突して顧みざるは寧ろ賞贊するに足る。

×

英雄時代去りて平凡時代來るとは、小成者流の口にすべきこと、血氣の壯んなる青年が初めより平凡を以て居りては、九十里の半を往かんとして遂に十里にも足らざるが如し。

×

劇しく動けば、汗流れ、塵を被むるが、靜にするも身に垢塵なきを得ず。

×

人には幸不幸あり。運は運として己れの信ずるところに向ひ、爲し

得らるゝ限りをなしてこそ生き甲斐はあれ。

×

騎虎の勢とは、自らの力なきを示すに過ぎず。力の十分なれば、虎を馭するに於て何かあるべき。

×

尺蠖の屈するは伸びんとする者、屈せずして如何に伸ぶべきや。

×

割りの良きは、正當の價なるに較べて何處にか缺點あり、初め頗る便利の多きも、後、漸く振はざるを見る。

×

世の進むに方り他に先んじて進むは、世の退くに際し他に後れて退くと同じ。

×

時代に先んずといひ、時代に後くるといふは、もと其の時代の狀態如何に因りて褒貶すべき事にして、究極、時代に拘束せらるゝは到底大人物の器にあらず。

×

一人前として對等の抵抗力を有せざる者は、己れ自ら防禦に堪へざ

るを念ひて抑損するが當然にして、若し一人前に足らざるを顧みもせず、敢て他を罵る以上は他の怒りて打擊を加ふるを覺悟せざるべからず。一人前に足らずとて、意のまゝに他を罵り、而して他の默笑して止まんことを望むは謬れりといふべし。

×

善く謀る者は兎かく躊躇す、奈破崙三世の如き、善く謀り、而して屢々躊躇せり。

×

人は先づ自ら侮りて他に侮らる、自ら侮らずして人に侮らるゝある

も、自ら侮るに至りては唯だ朽敗を早くするのみ。

修養

黽勉して有用の人物と爲らんとは、青年の自ら望み、少くとも父兄に望まるゝ所なるが、教場に於て人の世に立つ所以を教へられず、何等かの方法を以て補ふべしとて、書類にて儒教の書、佛教の書、基督教の書、延いて歴史傳記等、境遇及び嗜好に勸めらる。謂ゆる修養書として斯かる書類の勸めらるれど、聖賢と時代の隔たり、英傑と時勢の違ひ、其の言行を記せしを讀みて敬服するも、聊か二階より眼藥をさ

さるゝ感なきを得ず。寧ろ寶物として尊重し、實用の爲め更に卑近なる者を得るに若かず。德川時代の大家名家の述作中、修養に益するあれど、是れさへ讀みて少しく緣遠く感ぜらる。玩味すれば大に得る所あらんも、幾許か素養ある者に適し、然らざる者に疑はし。

×

人は己れ自ら如何の地位に在るかを考ふるを要す、汝自らを知れとは古今を通じての名言なり。

×

尋常人より學術的の趣味及び能力の優らざる者は、一と通り教科書

の類を記憶するも、特別に此の方面に爲す所あるを得ず。其の趣味及び能力の優るやを、十分に判定し得ざるが、若し少しにても優れば、三十以前、晩くも三十五以前に、何等か成績の觀るべきあらん。大器は晩成す、老いて顯はれ、死して顯はるゝあれど、多くの場合、三十以前に錐の頴を脫するを認むべく、三十五まで唯だ授業し讀書するに止まるは、僅かの例外を除き、身を終るまで言ふべき無く、博聞强記、問はれて知らざる無くとも、遂に生字引たるを免れず。文藝は尙ほ更にして、二十五以前に一部の人の注意を促さゞれば、相當の能力なしとすべし。早熟早老は屢々天才に見る所、壽にして恥多きの稀れなら

ず。其れ丈け早く能力を發揮するを要す。早熟晩老なるに若くは無けれど、幸にして然るを得るやは豫め必するを得ず。學術又は文藝に志す者は、此邊に考ふる所なかるべからず。大器晩成を以て自ら慰め、徒らに他日を期するは、事の宜しきを得るものならず。

×

如何なる人の教訓も、或る部分に於て偏す。同時代の幾人かの教訓を通じて觀るに、甲に足らざるも、乙に餘りあり、丙に餘りあるも、乙に足らず、併せて考ふれば、時代にて甚しき差違なし。昔は勿れ主義にして今は爲せよ主義なりとあれど、昔も爲せよ主義あり、今も勿

れ主義あり。古聖賢も人格及び意見の區々にして、時代を經て淘汰せらるゝを免れず、古來の教訓にして、如何なるが最も擴まり、如何なるが消滅に歸せるか。之を察すれば、今更の感あらん。

×

骨は硬きを貴び軟きを卑む。軟骨漢は爲すこと有るを得ず。

×

人は自ら卑むを要せざるも、故さらに自ら尊くするをも要せず。

×

一言にして運命開拓を盡くさんか、初め易きを避け難きに就けよと

いふ、是れのみ。

×

凡そ人に望むべきは、其の動きて而も靜かなること卽ち是れ。

×

過去の修養書は、智及び仁を重んじ、若くは亂世に於ける勇を重んじ、米國の成功書は平時に於ける勇を重んじ、現代に缺くべからざる者を示す所あり。我國にも一押し二金三男といふが、押しを善き意義に解する限り、要を得たりと謂ふべし。

×

老西鄉が人の乞へるに應じ、斷而行レ之、鬼神避レ之、或は盡人事而待天命など書せしは、自らの覺悟に益すると同時、一部人士を指導する所ありたるべし。此等の言は輕々しく聽けば、何等得る所あらざるも、注意して聽き、百思千考すれば、行爲の上に影響するの少からず。格言其の物は今日の人も能く之れを知れど、唯だ之れを味ふこと淺く、諳誦しつゝ消化せず、知ると雖も知らざるが如きなり。

×

國家の益々長期計畫を事とする如く個人も益々之を事とするや否や。

×

大器晩成は前半生を怠惰にすべきを意味せず、多くは前半生の勤勉の結果なり。

×

武士とは如何なる者を指すの稱呼なるか。第一、勇氣あるを要す。事に臨みて奮躍猛進し、怯るまず、臆せず、卒然難境に瀕して而も自若、必ず此れに打ち勝たんとし、毫も畏縮退避するあるべからず。第二、懷を持する大なるを要す。大事を念ひて小事に齷々せず、居常國の爲めに計り、又た道の爲めに盡くすを旨とすべし。謂ゆる食はねど高楊枝とあるもの、多少心を處くの高きを意味す。第三、分別あるを

要す。事を苟くもせず、漫りに刀を拔かず、拔けば必ず血を看る。究竟沈著にして思慮あることを尚ぶ。是れ此の三つは、甲冑を着くると着けざると、大小を佩ぶると佩びざると、皆な均しく具へざるべからざるの事、商業に從事し、工事に從事するにも、必ず缺くを得ざるもの、而して能く此れを具備したるは、卽ち武士として全きものとすべし。

×

進化の世に在りて何人も向上を要す。人々皆な向上を念として、然る後社會の向上得て期すべし。向上は必ずしも偉人たるを理想とせざるも、人々各々其の分に應じて爲すべきを爲し、以て精神上若くは物

質上に進む所なかるべからず。

×

紳士たるには、人に相槌打ちて演劇談し骨董談するのみにて足らず、千萬人の反對するも我れ往くの概なかるべからず。

×

吉田松陰の松下村塾は教ふる所の他に優りしに非ず、出入して學べる所の他に異なりしに非ず。塾生相ひ會して古今を論じ、古人の言行に照らして當世の方向を定め、活社會に出でゝ疑惑するの多からざりしのみ。

×

自らの力を以て立脚地を作るには、理論に拘りて左顧右盻せず、苟も己れの是認する所、決意して著手し、執着して從事し、其の結果を見ざれば已まざらんとする性質を養ふを要す。

×

強き刺戟は久しくするを忌む。

×

威武に屈せざる人にして始めて威武を備へ、力を振ふに堪ふべく、富貴に淫せざる人にして始めて富貴に居り、事を成すに堪ふべし。

×

修養の途は多岐なるも、偉人豪傑を追憶し、其性格及び行藏を考ふること最も有効なる方法の一に居る。

忍耐

決斷及び忍耐に缺けたる者は實行力無し。人に依りて現はれ方は區區あれど、何事をか成就する、必ず決斷及び忍耐に俟つ。

×

艱難も忍耐すれは艱難たるを感ぜず。

努力

怠りつゝ三年間爲す所は、勉めつゝ一年間爲す所に若かざるも、同等に勉むるに於ては、一年なるは三年なるに若かず。

×

人を知る事は難し、自らを知る事も亦難し。その短所を知り難きのみならず、長所も亦知り難し。案外長所の潛めるを知らずに過ぐることは尠なからざるが、斯くの如きは奮發次第努力次第にて現はる。是れ運命にて、致し方なしと觀じたる時、一奮發すれば致し方なきの運命に

非ずして致し方あるの運命となる事尠なからず。

×

努めて出來ることもあり、出來ぬこともあれど、兎も角も努むべきなり。かくして人格鍛錬され、修養の効現はる。

×

憤怒して志を立て能く事業を成就するあり、其の憤怒するは自ら益し、事業に於て世を益するが、侮辱を被れるとて直ちに加害者に復讐せず、事業を以て之を凌駕するは復讐の最も穩當なるものとす。社會の秩序を紊さずして社會に利益を與へんには、怒りて不可なく愈々怒

りて愈々可なり。

×

腦中に幾多の思想の湧き出で、人の言ふ所を聽いて平凡に感じつゝ、敢て自ら進んで言はざるは、必ずしも謙遜よりせず、思想が或る邊まで纏まりながら、之を發表するに努力を要し、其の努力を厭ふに出づ。

×

歳月其物は何の價値なし、唯だ勞力の貴ぶべきあるのみ。

×

自ら是認し、自ら必要と信ずる所は、自ら滿足するまで努力する、

之を力行と稱す。

×

默すべくして默するの力行なると同じく、言ふべくして言ふは、言ふべくして言はざるに比し、確かに力行なりと謂ふべし。

×

力行せば事は成り力行せざれば事は成らざれど、事に良否ある、力行して事の成るの必ずしも稱すべからずとせんも、心に疚しきは何處まで力行するに堪へず。精神に異狀あるは格別、普通なる限り、日夜黽勉して倦まざるは、其の事や必ず善良なり。中途に廢するは、心中

に惑へるが爲めにして、强慾非道、人を苦めて到らざる無き者、將に死せんとして念佛を唱ふるは、非道を以て一貫するに堪へざるなり。力行して惑はざるは、良心なくして能くすべからず。良心よりせば、爲す所に過失あるも、大體に於て人に益すべく、益する無きも、自らの良心を鋭敏にするの効果あり、故に力行して惑はざるは仁に近し。

×

人々信ずる所に向つて勇進し努力するの必要なる、歳末誰か感ぜざるぞ。

×

成功

成功を求むるは可、失敗を避くるも亦た可、然らずんば則ち何事をも成し得ざるに終らんも、而も大に爲すことあらんと欲せば、成功失敗を超脱するに若くはあらず。たゞ己れの職分として爲すべきを爲し、成敗我に於いて何かあらんといふこそ、最も健全なる覺悟とすべけれ。

×

成功の何たるかは人毎に說の異なるも、身の死すると共に消滅し、

或は死するに先ちて既に消滅するは、果して憾なかるべきか。

×

手段を擇ばざるも成功しさへせば、時人に賞められ羨まるゝの常なれど、其成功の大なれば大なるほど、初めに行ひし惡事の之を傷くること益々甚だしく、且つ後の之を學びて志を立つる青年を毒すること更に甚だし。

×

仕上げにして善きを得ば、事玆に決す。成功は何の點よりするも、唯だ可なるを見て不可なるを見ず。

×

功の偉なるは德を立つるに在り、言の傑なるも德を立つるに在り、謂ゆる勳業の若き、謂ゆる篇籍の若き、共に均しく尋常事のみ。

×

早く顯榮に登るは、何の點か事の容易なる者、容易なるは早く熟して早く衰ふ。

獨立

服從は或る點に於て美德なれど、獨立して能力を發揮するは、此に

劣らざるの美德にして、後者の多からずんば、社會の發達を期する能はず。

×

人は各々獨立を念とせざるべからざると同時、他と與に俱にせんことを忘るべからず。獨立獨行と言はずして、獨立共行といふべし。

經驗

慣れたる方向にて奇智湧くが如く、一を聞いて十を知りながら、慣れざる方面にて一小事の爲めに狼狽して色を失ふは、實際に鍛錬する

所なきが故とすべく、若し鍛錬に意あらば、成るべく新たなる經驗を心掛くべし。

×

秩序の紊れて經驗の恃まれざる時代こそ才任せにするを得れ、秩序の成り立ちては必ず多少の經驗を要し、或は大に之を要することあり。才能も經驗にて磨かずんば、相應の働きを爲し得ざるべし。

×

惡行は畢竟經驗の足らざるに胚胎す。久しき經驗の結果より察する、最良の方略は惡事を行はざるにあり。

×

陸國の人が己れの獨斷を基礎として瞑想に耽るに對し、海國の人は自他の實驗を基礎として活きたる思考を逞くしゝは、地動說の殆んど全く伊太利に成り、進化說の殆んど全く英佛に成りしに徵して知るべし。

滿足

天國は汝自らに在り、心の樂しくば何物か樂しからざらん。但だ器の小なるは早く滿足し、器の大なるは遂に滿足せず。

×

自ら滿足するものは自ら落後を求むる者、少しく怠れば、小過は大過と爲り、小弊は大弊と爲り、容易に救ふべからず。

×

滿足する者は衰へ、落膽する者も衰ふ、唯だ早く長處短處を知り、能く短處を補ふ者、隆盛の域に進むに堪ふ。

×

滿足は怠慢の萠す所、勞せずして天然に惠まるれば、心身共に早く衰弱せん。

思慮

人に憂ふべきは多言に在らず、空論に在らず、徒らに思慮するに在り、單に思案に暮るゝに在り。

×

何人も幾許か思慮し、或は思慮し得る丈け思慮するも、成案を力行するを厭ひ、沈思熟慮して立消に終らしむ。

人氣

一たび人氣を收むれば、爾後に事を處するの頗る困難なることあり、電燈の白熱を放てる後、燭光の極めて薄く、有れども無きが如くなると同じく、既に人氣を收めて尙ほ之を維持するには、前に成しゝよりも幾層か大なる事を成さゞるべからず、否らずんば人々をして失望せしむべき恐れあり、之をして失望せしめざらんとして、强ひて事を試み、愈々出でゝ愈々拙、動もすれば人氣の絕頂より墜落し、有らゆる誹謗讒謗を被むるに至る。

×

人氣は一時的なるの多く、之を得るの早きは、之を喪ふも亦早し。

×

人氣を集むるは不可、全く人氣なきも不可、人氣は加減ものなり、過ぎたるは猶ほ及ばざるが如し。

×

人氣は賴み難し、忽ち來り忽ち去る。古來豪傑は屢々之が爲に誤まらる。

×

人の噂も七十五日とは誰が言ひ出せるか、人の噂は大抵七十五日ぐらゐなり。人氣商賣する者は、成るべく其の七十五日の中に遂行せざ

るべからず、七ころび八起きを期する者は、其の七十五日を笑つて通らざるべからず。

目的

板垣氏曾て陸奥氏を評して曰く、人は何程彼を誹るも、予は彼に與みせんと欲す、彼の目的は甚だ好し、唯だ目的を達する爲に、如何なる手段をも忌み憚らず用ゐることあり、是れ其の彼を識らざる者に嫉視せらるゝ所以なるべしと、二君たるものマキアヴェリに私淑するあるか。マの人生に期せしは、蓋し細工は流々仕上を覽よといふの類ひなりし。仕上は覽たし、目的は達したし、而も目的を達するに如何なる手段をも用ふべく、倒行逆施毫も厭ふ所あらずと謂ふは、其の目的の終局なる時なり、若し其の目的にして他の大目的の手段たるに於ては、手段の爲に是非曲直を構はざる次第と爲る、恰も鼠を惡むは其の器物を毀損するに由るに、只管之を殺さんとしてステッキにて障子、唐紙、時計、花瓶を擲き壞るが如きなり。

×

意識せずして事の成るは偶然なりとせんも、必ずしも然るにあらず、生まれて大なる才能を稟けたるは、事に臨みて特に工夫する所なく、

談笑の間に之を處辨し、他の細心深慮すると趣を異にし、寧ろ無意識として不可なきが、而もこの然るの故を以て目的なしとすべからず。

×

手段といひ目的といふは、或る一時の關係にして、手段に不正不良の跡あらば、目的の善なりとも、差引して零たること無しとせず。

朋友

惡友と交るを恐るゝは、自ら惡友に感化せらるゝを慮るもの、本來惡友と相ひ距る僅に一二歩、辛うじて惡人たらざるのみ。さる薄弱なる性格を以て正道に處し、何程の事を爲すに堪へんや。

×

其の相知り相知らるゝの深きに隨ひて、益々眞の朋友たるに邇かし。而して世に朋友の尠きを言ふは、相知り相知らるゝの難きよりして之が說を作すなり。

×

惡友の畏るべき虎よりも甚だし。人皆な之を知るも、惡友の爲めに害を被むらざる間、之を感ずるの薄きを免れず。

×

若し友を欲するならば、之を其の時代に於てすべく、其の時代に友なくば、友なきも妨げなし。何ぞ千歳の後に待つを要せんや。

×

感化する所なしとて何の咎むべきなけれど、得べくんば惡友と交りて之を良友とすべし。

×

友の善惡は己れ自らに因りて定まること多し。

諾否

啻に人に對して承諾の重んずべきのみならず、己れ自らに對し之を重んずべし。決意せざれば其れ迄なるも、苟も決意する、則ち何處までも之を遂行するに務むべし。

×

人の知らざるの故を以て、屢々決心を飜すは、人の知らざる罪を犯すに當る。

×

人事は多く不用意の間に經過し、不用意の間に經過せしめざる可からざるも、承諾と不承諾とに歸するあるを察すべし。

×

挨拶のイエスは、幾回にても繰り返し得んも、承諾のイエスは漫りに發すべからず。

×

果すの疑はしくんば、明かに諾することを避くべし。承諾の語を發せざるも、他に言ふべきこと頗る多し。

服從

場合に依り抵抗を事とし、破壞をも敢てせざるべからざれど、社會に存在する間、常に幾許かの服從を免れず。

×

均しく屈從するならば、早きに於いてする丈けそれ丈け得策なり。

×

己れの正道とする所は、如何なる權力にも屈下すべきに非ざるが、己れの職分とする所には、飽くまで服從すべきことあり。

負債

借金の種類甚だ多く、可なるあり不可なるあるが、中には不可なる

者の、可なる名の下に行はるゝあり。

×

若し借金せんとならば、事業の爲めに大に借るべし、不幸不運に際して借るべし。己れの贅澤若しくは生活の爲めに借金するは不心得至極なり、不德なり、罪惡なり。

×

斷じて借金する勿れとは、卽ち斷じて生計の爲めに借金する勿れといふの義なりと知るべし。

×

靜思

時として雜遝せる社會を離れ、單身閒地に孤處し、以て百般の煩累を脫せんとするは人の情なり。而して一たび此の境に臨めば、依りて幾分か自己の自己たる所以を知り得べく、業に追はるゝ者の、時に全く業を離れて靜居するは、其の業に取りて益する無しとせず。

×

活動は生命の具體的に現はるゝもの、靜思は生命をして意義あらしむるもの、活動に專らなる者をして少しく靜思せしめ、靜思に專らな

る者をして少しく活動せしむるは、其の陷るべき弊より免れしむる所あらん。

×

一生を通じて何事か成さんとせば、時に一生のことを考へざるべからず。神ならぬ人は、來年のことを言ふも鬼に笑はる。將來の豫想の實際と違ふは言ふ迄もなけれど、たとへ齟齬するとも、全く考へざるに優る。

×

大に動きて時に全く身を世外に逸し傍觀して密に之が迹を察す、則ち其人に取りて意外の益たること鮮からず。局に當る者は屢々危疑して是非の判斷に苦むことあるも、一たび退きて靜かに變動する所のものを觀る、能く勢の向ふ所を會得し、又た兼ねて己れの何たるやを分明にするを得て、富貴安樂の外、脫然として別に存ずる所のものあるべく、大悟徹底と迄に行かざるも、其の人生に就き、多少の悟入するあるは保證すべきなり。

×

最も閑暇なる日は最も靜思に適す。自ら省みて心に疚しき無きか、疚しきは如何にして拂拭すべきか、之を思ひ之を慮れば何等か得る所

あらん。

×

考ふるは可、考へ能ふだけ考ふべきなり。されど考ふるに際限無し、或る程度に思ひ切りを付けざる可からず。その思ひ切りが最も肝要也。

×

靜思は煩悶とならざるやうにせよ、活動は狂奔とならざるやうにせよ、靜思を靜思たらしめ、活動を活動たらしむるは、靜思活動を適當に交代せしむるに在り。

×

人は靜かなる處に在りて沈思默想すれば、髣髴として小我の大我に冥合し、世間の苦樂を遺忘し、一種の悅樂を感得することあり。

×

學ばざるの殆けれど、思ふの必要をも認むべく、思ふには燈を假らず月星を假るの一層有効ならずや。ビスマルクは夜中單身犬を携へて郊外に出でしが、雄謀大略は實に此間に成りき。グラッドストーンは夜半議院より徒歩にて歸り、若し雨天なれば馬車にて歸宅し更に雨具を整へて闇夜に歩行せり。此類の事は擧げて計へ難し。紅燈綠酒に夜を深かすも多けれど、一世に爲すこと有るの士は、月星の光に親むの

珍しからず、闇夜も必ずしも妨げず。

×

冥想と無念無想と文字の上にて別なれど、後者は前者の一方法なり。

言行

言の非にして行の是なるは、言行共に非なるに優れど、普通に言といへば概して善言のことにして、行の此と伴はざるより、言行不一致として之を咎む。固より惡言惡行の一致を稱するにあらず。

×

言行一致といふことは、必ずしも深く意義を究めずして可。言ふ所は比較的善ければ、其の通り行ひて差支なしと心得べし。

社會觀

文明

文明は無代價ならず、東文明の西文明に讓るは、代價を拂ふの少きのみ。

×

根本を得れば枝葉を捨つべし。文明に伴へる雜多の事物は、必ずしも追隨するを要せず。

社會

進歩する社會に於ける自然淘汰は、多くの場合に優劣を顚倒せず。

×

社會の活動は個人の活動より成り、個人の活動の足らずんば、其の社會は、比較的活動の盛んなる社會の爲めに支配せらるゝや明けし。

×

社會の進歩せりとて、之を構成する人々皆な同時に同樣に進歩せず、或る部分は著しく進歩し、知識に於て原人と違ふこと恰も人類の猴類に於けるが如しとすべきも、多數は然るを得ず、極めて遲鈍なるに至つては殆ど原人と大差なし。

×

世は腐敗するといはるゝも、尙ほ多少健全なる分子あり、社會の衰へずして益々榮えんとする所、以て見るべし。

×

世は必ず進歩すと限らず。たとへ大體に於て進歩して已まざるにせよ、其間一進一退嘗て絶ゆることなし。

×

公的衞生は腐敗物の除却を先とす。俗に謂ゆる臭い物に蓋をするは、事の最も危險なる者、苟くも臭氣の洩るゝある、之を探討し、之を清

めざるを得ず。

×

人事は無意識の間に於て或は成り或は敗るゝもの頗る多し、社會の變遷は殆んど盡く思はず知らずの間に於てするものゝ如し。

×

裁判所の外に監獄といふ所あり、病院の內に地獄室といふところあり、寺院の傍に地獄といふ所あり、地獄の沙汰も金次第、金ある者は監獄に入るとも、監獄にあらざるかの如く自由なるを得、而して病院に至りては金の功德更に大なり、生死試驗所といふ地獄室を免れて、

親切と鄭重とを以て滿たされたる上等室に在りて治療するを得可し。寺院の領内に在る地獄に至りては、以て閻魔王に賄ふ可し、要するに裁判所に對する監獄、病院に對する病室、寺院に對する墓地、怖ろしきところなり。監獄に押丁あり、病院に看護婦あり、墓地に墓番あり、鬼とも見え、佛とも見ゆ、金次第なりといふ。

×

必ずしも奸佞の徒が事を誤らず、必ずしも愚劣の輩が事を誤らず、英主賢相の名ある者も亦た事を誤ること稀ならず。事を誤りて尙ほ社會の繁盛するは、誤れるよりも誤らざるの多きが爲めにして、若し誤

らざるの更に多くんば、一層進歩の速かならんと察せらるゝが、身體の强健なる者が結核に打ち克つが如く、社會の力あるは百害を排して進歩するも、其の力なきは僅かの害に妨げられ、一たび挫折して復た振はず、決して一概に言ふを得ず。

秩序

群衆の上にては、治世と亂世と、不惑と惑との關係にして、治世は秩序關係者の多數が惑はず、之を維持せんと欲する場合の事、亂世は其の多數が惑ひ、之を維持せんと欲せざる場合の事なり。

×

秩序の必要なるは甚だ明白、之を維持するは國民たる者の義務なれど、從來の秩序が群衆の康福を增進するに適せずんば、之を破壞するを以て義務とすることあり。

時代

創業の臣は時代に先んぜる者にして、誠節の士は時代に後れたる者、先んずると後るゝとに於て互に異なるも、進止行動の以て世道人心に裨益ありしは相軒輊すること能はず。

×

衰亡の國に在りては、其の時代に後るゝ丈け益々其人を高しとすべきこと、猶ほ興隆の國に在りて、時代に先んずる丈け益々其人を偉とすべきが如し。

×

徒らに遠き後代に空想を描くよりは、偏へに其の時代の爲めに盡す所あるの優れるに若かず。

×

千歲の後を念ひて同時代の事を忘るゝは、時代の爲めに不親切なる

者にして、己れの父母兄弟及び關係の人々を忘れて、千歳未知の人に戀々たるなり。

×

時代を超出するは、其の自から心を用ゐるの大なる所、苟くも事を爲すに當りては、唯だ宜しく其の時代の爲めにせんことを念とすべし。

×

治世の續きて事を好み、亂世の續きて無事を希ふは人の常情、有力なる多數が無事を希ふ時、如何なる野心家も亂を起すを得ず、有力なる多數が事を好む時、如何なる政治家も平穩に經過するを得ず。

×

漠然時代に對するよりは、時代を背景とする人物を對手にするの便利なるを覺ゆ。

道德

何の代にも道德の卑めらるゝは、一部分偏窟及び僞善の罪に歸すべし。孔子の傳を稽ふるに、絕えて偏窟ならず、絕えて僞善ならず。

×

道德を讀書の如く心得る者あり、道德に關する書を讀むを道德とし、

此を讀まざるを不道德とし專ら書を讀み書を講ぜんとす。其の弊の知られたるや久しく、而して其弊の除かれざるも亦た久し。

×

道德は偏屈の義にあらず、僞善の義にあらず。今や道德は之を標榜する者より、却て其の外に行はるゝ觀あり。

×

實業道德に關しては、百の講演を爲すは一の模範を示すに若かず。然るに現在の實業家より模範とすべき人を擧ぐるは極めて困難事にして、勢力少き者は人格の善きも、以て多數を感發せしむるに由なく、

而して勢力ある者は概して性行の如何はしき嫌ひあり。

×

傑出せる道德家も或る時代に在りて其の時代の習慣より離れず、言行も後世の標準を以て律し難きあり。孔子の言は今尙ほ人の格言として尊重する所なるも、時代相應に疑ひを被むる無からず。

×

社會の進行の確實なる處には、德行の人を見るに難からず。

×

社會の盛衰は必ずしも富强を以て言ふを得ざれど、多樣の點に於て

進歩の明かなれば、道德も亦た進歩しつゝありとして誤まらざらん。

×

先年政府が撲滅に務めし危險思想は、危險なるに相違なきも金錢の爲めにせしに非ず。忠義顏して不忠を事とし、愛國顏して賣國を事とするに孰れぞ。

科學

科學及び宗教は根本に於て相ひ近く、而も末に於て相ひ遠く、往々衝突の烈しきに及ぶ、而して人の玆に別るゝは性癖よりせずんば、則

ち境遇よりせん。

×

科學は絶對的の知識を得んことを期せず、當時達し得る限りの點に達せんことを期するのみ。

×

宗教にて滿足したりし者が、科學の爲めに不滿足を感ずるに至りしかど、果して更に科學にて滿足し得べきやは疑なしとせず。

×

正宗の刀は、妙手の揮へば鐵を斷つべく、小兒の弄べば、自ら傷つ

くに終はる。村正の刀に至りては、之を佩ぶる者、人を傷つけざれば自ら傷つくべしと傳へらる。科學も之に類し、善意に之を使用すれば世に福し、惡意に之を使用すれば世に禍し、福せるの多くして、禍せるも少なからず。

門閥

石を千仞の山に引き揚げて、而して墜落し下す、則ち勢甚だ猛烈、これ重力を凌ぎて蓄積せる潜勢力の一時に現發し出づるなり、人の艱險に耐へて遂に能く偉功を成すも理亦た然り。但だ石の初より千仞の

山の上に在るあり、之を衝き墜すに、勢の疾きこと毫も刻苦して引き揚げたるものに異ならず、夫の門閥を負ひて衆人に推重せらるゝは、此に同じきこと莫からんや、高處の名は高處の石なり、引き揚げたると否とを問はず、墜落するの勢は全然同一にして、絶壁に立ちて尋常の石を投げ落せば、殆ど砲丸を打ちおろすが如き觀あり、乃ち事を成すに當つて、門閥なりとて決して忌むべからざるに非ずや、富貴若しくは權勢に緣ある者は、經歷の覩るべき無きも、自然に下僚を威服し能ふに非ずや、門閥は實に潜勢力を蓄ふるものなり。されど初より高處に在りし所の石を其儘にまろび落す者は、まろび落すことは爲し得

るとも、平地に降りて尙能く力を揮ひ能ふやは保すべきに非ず、卑きよりして石を引き揚げし者は、何に致せ、石を引き揚ぐる丈の能は確かに之れあり、たとへ高處に登らずとも、何がな爲し得べく、又何がな爲すべきなり。門閥は力ありといふも、之を消費するに止まり、之を增益するに長ぜず、造作なく顯官に列せる者が、顯官として相應に任に堪へ、衆の仰いで畏るゝ所にてありながら、職を辭して我れは顏に人に接するに及んで、大に愚を露はすことあるは、他の緣故に因て得たる潛勢力のいつまでも存續し得ざるが爲めのみ。政府の反對者が大言を吐き、太平樂を謳ひつゝ、どうにか暮らして行くのも、役人に這ひ

つくばつて小安を娛まざりし痞我慢といふ潛勢力の報酬にして、在官者には一寸不思議に思はるべし。

團體

人は自ら理由を意識せずして團體の犧牲となるを甘んず。實に人は團體の犧牲と爲るの本能を備へ、將校や、兵卒や、出征を命ぜられて殺し得る限り敵を殺し、自らも敵に殺さるゝを辭せず。敵とする所は兵として募集せられたる良民、我は其の何郡の人たるを知らず、之と少しの怨恨なし、而して互に猛獸の如く相ひ喰み、唯だ噬み殺すの少きを

憾むは、團體の爲めにするものにして、一旦平和となりて慶弔を一にして親戚故友と異らざるは、亦た團體の爲めにするなり。忽ちにして敵、忽ちにして友、變化の急なる、寧ろ怪むべきが如きも、當人は少しも怪まず、孰れも己れの果すべき分を果せりと爲す。

事業

絶えず創業の意を以て從事すれば何處までも發展すべし、されど創業の意を失へば發展止まる。發展止まれば衰ふ。三段なり二段なりの角力は多けれども幕の内は少し。三役横綱はいよ〳〵少なし。

×

今の世、何爲れぞ守成を説くや。創業に次いで創業、又創業、又々創業、絶えず創業を續くべきなり。

×

事業上に新を趁ふは、實益の如何に拘らず進取の氣象に富むを稱すべけれど、斯かるは却つて日常新奇を好まざる者の中にあり。故古河氏の如き、丁髷にして而も工事に最新式を用ゐぬ。

×

人の世に益するは事業にして、職業ならず。職業にて益するは、事

業となりて後の事なり。

×

時の金なると否とは問はず、事業の多寡が、時間の活用如何に依ること、言ふ迄もなし。

×

下等動物は兒の胎内に在ること短く、高等なるほど胎内に在ること長し。事業に於ても、準備の短きは早く利益を得、而して早く發展の止まる。

×

業は久と新とを貴ぶ。點滴石を穿つが如く、久しきに續けば則ち功あり。而も寶刀の鏽びて鈍なるが如く、新たに磨かずんば用ある無し。

×

適材の不適處に置かるゝは、多くの場合、己れの罪ならずや。不適處なるも、自ら不適處なるを感ぜずんば致し方なし、若し之を感ずれば進んで適處を求む可し。

×

事業を成すは必ずしも難からず、成し遂げたる後を如何にするやに就き、器の大小の岐る。

職業

坐して望むが如き職業に就かんとするは、代價を拂はずして物品を得んとすると同じ。必ず先づ眼勉せよ、忍耐せよ、而して報酬を忘れよ。收入なくば、襤褸を纏へよ。或時期に於て、望むが如き職業は掌裡に入り來らん。天は自ら助くる者を助くるやの明白ならざるも、自ら助くるは、志を達するの比較的最も確實なる路なり。

×

就職難を冒して就職するは一快事、己れの從事する職業をして政府の最高職に相當せしむるは更に愉快、其の上に出づるは愈々益々愉快、而して斯かるは單に己れ一個の愉快に止まらず。

×

職業なき者は、己れ自らを傷ひ、併せて世に害を與ふ。

×

現代は何人も職務あるを要し、職務なきは一種の罪惡たる觀あり。皇族を初め、皆な何等か職務に就くの得策にして、之を短時日に期し難きも、務めて奬勵せざるべからず。內地にて皇族は各々職務に就かれ、職務に勵まれ、唯だ華族の多く徒食しつゝあるを遺憾とす。

×

生活難の烈しくして、之を免れんが爲めに勤勞すといふは聽くべけれど、營業を專一にして他に顧慮する無きは、動もすれば無意義に生涯を送るに終る。

×

生活の爲めに職業を求むると言へば言ひ得んも、軍人が俸給勳章等を念とするよりも、專ら君國を念とし、又何程か君國を念とするの、遙かに多く能力を發揮し得るが如く、生活の爲めにするよりも國家の爲め、社會の爲め、人類の爲めにする方、多く能力を發揮し得べし、

ものゝふの矢橋の渡し近くとも急がば廻れ瀨田の長橋、職業を求むるに汲々たるは急いで損するものにして、自己よりも大なる者の爲にせば、成すべき事多く、其孰れを擇ぶべきかに惑はん。

×

就職難は社會よりも人に存し、社會に職業あるも、人之に就かずとすべき跡あり。

×

本來極めて虛弱なる者は兎も角、否らざる者は、成るべく奮發して業に就かしむべし。初めのほど事を成すに懶きも、漸く慣れて漸く氣

力を增し、次第に强健と爲るべし。

金錢

金あれば事を成し得べし、又た事を成し得べからず。金なければ事を成し得べからず、又た事を成し得べし。金なくして志を達せざるの稀れならねど、金なくして何事をも成し得ざるは之れ有るも何事をも成し得ざらん。黃金は有れば固より可無きも亦た可、要は頭腦に在り。

×

必要に應じて金を使用するは、當然の事を當然に行ふ者、己れ自ら

之が爲めに益し、社會も之が爲めに益す。

×

世に愛金の語あり、拜金の語あり、使用法を知る者に被らすべからざれど、使用法を知ると否と、明白に區別するを得ず。

×

金を憎むは甚だ少し。

×

金を有てるの大黑は常に小槌を揮る。努力を示せる也。努力のあるところ快心の事あり。唯金を有てるのみなる、福の神と云ふを得ず。

×

金さへあればといふも、愈々金を手にして何事を成すやは、疑問に屬す。

×

金錢を視ること土芥の如くなるは、世の貪慾を戒むるの刺戟劑と爲るも、總ての人に之を望むべからず。既に社會の必要について金錢の行はるゝ以上、之を土芥視するは、社會を解せざるの嫌あり。

×

金を費すに宜しきを得るは一つの技倆也。萬人皆よくこの技倆を具

ふとは云ひ難し。金を持てるは尠からず、是れを活かして遣ふ者と、是れを殺して使ふものと、知らず孰れか多き。

×

愛するも溺れぬが善しとあるが、金錢に於ても同じく然り。金錢を愛するも、溺れざるやう注意すべし。

×

金錢の必要なるは、使用するが爲め也。使用せざる金に何の必要ぞ。

×

世界に於て金を重んずる者は支那人なり、歐米人の金を重んずること

と洵に此に讓らざるも、事業を興す念の金を重んずるの念に勝つ者多し、是れ卽ち其國の益々進歩し益々隆盛に向ふ所以なり。啻に國家のみ然るに非ず、個人としても亦た同じく、金よりも更に事業を重んずる間、其の人の益々進歩するを期すべきも、事業よりも更に金を重んずるに至りては、既に其の人の終りに近づけりとすべし。

人物觀

人物

非常の時に非常の人ありといへど、非常の時に非常ならざる人も非常の事を成すと見ゆ。

×

利慾を離れ、精神の凛然たるは、概ね才幹に乏しく、大功を樹つるに難んず。

×

新人材は固有の能力を伸ばすに最も自由なる地より出づ。

×

志大にして才疎なる者、世實に之れ有るも、其の挫折するは、才の疎なるよりも氣力の足らざるに由來するの多からずや。

×

虎の虎たるは山野に自由を得るに存す、猛虎一聲山月高、凄壯の情景神に入るとすべきも、而も是れ其の出沒自在、一嘯して風を起すの概あればなり。捉へて檻中に投ぜらるゝ、百聲千聲するも、少しも凄壯を感ぜしめず、煩悶喚叫すとして憐愍を惹くべきのみ。

×

往昔言行の傳はれるの少く、後ほど傳はれるの詳かにして、詳かなるは缺點の見え易く、缺點の知れざる人より劣ると思はる。

×

影の遠ざかるほど大を加ふるが如く、歴史的の人物なるを以て、現代の人物に優ると考へらるゝことあるが、之に反し、光が近づくほど明を加ふるが如く、現代の人物なるを以て、過去の人物に優ると考へらるゝことあり。

×

普通人の眼眸の及ぶ所自ら普通の限界に止まり、復た之を超ゆること少し。稍々群を出づる者は稍々之を超え、大に群を出づる者は大に之を超え、別に尋常の外に於て逍遙する無きを得ず。

×

磊々落々と小心翼々と、之を兼ねんとせば兼ぬるに難からず。謂ゆる大膽にして小心なりとは即ち是れなり。文明國の紳士として恥づる所なしといふも、亦た是れなり。

×

歴史上に人物の續出せしと見ゆるは、或る特別なる時代を除き、眞に續出せしに非ず、幾年幾十年を隔てながら、後より顧みて續出せし

が如く認めらるゝ無しとせず、並樹の間を徘徊すれば、遠きは密邇し、漸く近くして漸く疎、最も近きに樹あるをも覺えず。

×

無教育なる者が政治界に實業界に跋扈するは、原野の植物の風雨に曝されて自然淘汰を經たるに異ならず。リンコーンの如く、亭々天を衝くの巨木は、之を近郊に求むる能はず、之を遠き森林に求むべし。

×

心得の確かなる者に、得意時代と云ひ失意時代と云ふものゝある可き無し。如何なる場合にも得意ならず、又失意ならず。

×

熟考に長ずるに於て、學者に及ぶ者はなからん。彼等はよく知り、よくその思想を豐かにす。しかも、判斷に至れば則ち惑ふ。他に判斷し實行する者なかる可からず。

×

大賢は愚の如し、大愚は奇の如し、大奇は俗の如し、大俗は豪の如し、大豪は怯の如し、大怯は俠の如し、大俠は奸の如し、大奸は忠の如し、大忠は暴の如し、大暴は仁の如し、大仁は凡の如し、大凡は賢の如し。

×

土地には耕し得べくして耕されざる地を耕し、人には發揮し得可くして發揮されざる能力を發揮す可し。

×

實力なくして位置を占むる者は虚勢を張り得る間に愉快を感じ、實力ありて位置を占めざる者は虚勢に勝つ所に愉快を感ず。

×

口を開けば愚を知らるれど、愚なる者が愚を掩へるとて能く何をかせん、獅皮を被りて沈默し、以て衆を欺くは、驢鳴して相應の荷を負

ふと孰れぞ。

×

沈默にして心術の知れざるは、面白からず感ぜらるゝも、難局に臨み從容として事を處するに方りて、頓に好ましきを覺ゆ。

×

最も力ある者は、往々にして最も知られざるに終る。

×

世上評判の囂しきと否とに據りて人物の大小を說くは、凡俗中の凡俗たりと謂ふべし。

×

老獪と見えずして老獪なるは、眞に老獪の逞しきを覺ゆ。

×

蠟燭は自ら消滅して光明を發す、自ら消滅するを知らざるものは光明を發するを得ず。

×

凡そ時代と共に遷るは人の習ひなれど、而も全く時代に化せらるゝは尙ほ人物の小なる者にして、其の大なるに至りては能く世と推し遷りつゝ又た能く其の上に出で、一概に時代精神を以て律すべからず。

×

若し平素人事に與かることなく、時ありて局外より社會を觀れば、多數の群がりて奔走するを認むるのみにて、孰れが俊傑たるかを判別し得ざらん。特に一局部に注目せるが爲めに、俊凡に差を立つる事と爲れるものにて、同樣に他の方面に注目すれば、到る處として差別なきは非ず、前に差別なしと爲しし所にも漸々差別の現はれ出づべし。

偉人

偉人は獨り出でず、一の偉人の出づれは他にも偉人の出づ、所謂氣

運なる者なり。

×

凡庸の徒は飽食暖衣して逸居するを欲し、牙籌を以て無聊を忘るゝを得るも、豪傑の士は斯くて日を送るに堪へず、髀肉の生ずるを歎ぜざるを得ず。

×

國亡び民散りて英傑の名の遺れるの少からざるも、年代と共に漸次湮滅するを免かれず、其の赫々として當世に耀き、尚ほ後代に傳はりながら、動もすれば文人に讓らんとする觀あるは、多數人に依頼せるが故なるべし。

×

奈破崙の幸福なるは十七歳迄なりといふ者あるは、即ち爾後野心に驅られて東奔西走し、一日も心中の安寧を得ざりしを指す。百計盡きし後、一妙案の出でたる時、欣喜雀躍したらんも、普通の歡樂を事とせるは日數に於て甚だ少なく、普通の意義にて幸福とすべからず。されど奈破崙の愉快を感ずるは、安樂よりも南征北伐の間に存せずや。肉體に苦痛あれど、己れの力を伸ばし得る所に滿足を感じ得たらん。彼は一種の理想に生き、之に近づくを以て滿足せしもの、其の羅馬を

模範とし、世界の地圖を改め、永遠の平和を計れる、實に時代を超越せる觀あり。

×

ルビコンを渡り、惡漢と罵られ、狂人と嘲らるゝも、ケーザルはルビコンを渡りて勝を得、而してケーザルたるを得たり。

×

世に天才の甚だ少く、平凡なるの甚だ多きは皆獨得の才を具へざるに非ず、具ふる所の獨得の才が時代に顯るゝに適せざるなり。半雨天なる時、雨は盡く日光を受けて虹たる可き素質あるも、人の眼に映ずるに或る角度を要し、角度に當るは色彩燦然、天の浮橋の如く、而して他は總て朦々茫々見る可きなし。人物の構造は雨滴より遙かに複雜にして環境との交渉最も密なり。人に超ゆるの才能あるも、或は藤原時代に適し、或は足利時代に適し、或は織豐時代に適し、或は德川時代に適し、適するは顯はれ、適せざるは顯れず。

×

偉大なる力ありて能く之を發揮せし者は、何時代に屬するやの言ひ難きあり。

×

天才は病的なりとは、往々事實の上に見る所、之をして學校に在らしめば、必ずしも良成績を得ず、或は落第し、半途に退學すべし。

×

非凡なる凡人とはシドニー・スミスが或る人を評せし語にして、もと嘲弄の意味に於てせしなれど、必ずしも嘲弄に限るべからず、後年屢屢賞讃に用ゐることゝ爲れり。非凡なる凡人も時に無用の用なからず。而も必要ありといふ迄にて、以て第一とするに非ず。新局面を開展するは、非凡なる非凡人に俟つこと多し。

×

孔子と雖も毛を吹けば疵の求むべきあり、古聖賢は各々傑出する所ありしも、無瑕疵にあらざるや知るべし。

×

英雄の位に在る、唯だ遠く仰がれて、周邊の冷酷を極むる者あり、これ人の久しく留まるべき所ならず。然れども英雄は尙ほ英雄として見るべし。英雄ならざる者にして之に摹倣(もかう)するは、西施の顰(ひそみ)に倣ふにも劣る。

×

ジョンソンが字典を完成し、チエスタフイルド伯の保護者らしく粧

ふに對し、保護者とは人の水中に苦悶するを傍觀し、岸に上るを視て遽に援助する者なるかと言へりし時、報復の方法を得たるを感じたらん。ゾラは今も疑問なれど、死するまでアカデミーに排斥され、死してパンテオンに葬らるゝに決したる、若し彼にして知るあらば、勝利を得たるに滿足せん。

×

豪傑に二種あり。一は間斷なく働きて瞬時も徒過せず、他の嬉遊消閒するに方り、己れは則ち矻々として事業に勵み、精勤の効を積みて竟に他の上に出づ。一は時々休止して時々行動し、而して其の行動する、前に休止の際に蓄ふる所を悉くして一時に迸發せしむ。故に休止するや、他の後に落つるを免れざるも、一旦力を發する、必ず他に倍するを得、非常の猛勢を以て非常の飛躍を敢てす。

則ち一は斷えず或る程度まで力を出だして、而も能く久しきに續くに堪へ、他は初め無爲にして力を蓄へ、而も動きて能く一時に發するに堪ふ。久しくして後ち成ると、一時にして遂ぐるとの同じからざるも、力の分量に至りては則ち一なり。小なる者の間斷なく勤むるは、大なる者の休息するに若かず。小なる者の力を蓄へて一時に發するは、大なる者の斷えず黽(つと)むるに及ばず。

才子

才は難し、之を用ゐること一層難し。多才多能の士にして自ら用ゐるの宜しきを得ず、小才と擇ぶなきに終ること、勝へて計ふべからず、萬能餘りありて一心足らざるの語、時として適中するを見る。蓋し人は能不能の別あるも、勉めて怠らずんば何程か成就すべく、特に生れながら才能を具ふる者は勉めずして常人に超出するを得べきが、隨つて世に一種の能者あり、或る一事に著手して思はしからず、則ち去りて他に赴き、尚ほ又思はしからず、更に去りて他に轉じ、其の轉

徙する間、一々嶄然として頭角を露はさゞるあらず。かくて一事に定住せず、絶えず變化し廻るは、其の人の自由意志にして、實に好機會に遭逢する所以なりと雖も、其の最も不幸とすべきも亦た此に在るを忘るべからず。

×

凡そ大なる君子、大なる英雄は、一面に於て亦た實に大なる才子たり。蓋し大なる才は、君子に非ざれば能はず、又た英雄に非ざれば能はず。